

目的意味論の群論的形式化とその哲学的含意

道田 蒼人 (Soto Michida)

京都大学文学研究科哲学専修

目的意味論を牽引してきた R. G. ミリカンの名は、志向性の自然化への貢献によって広く知られている。だが同時に彼女は、前期ヴィトゲンシュタイン的な像理論 (picture theory) の擁護者としての顔をもっている。実際ミリカンは、記号とその表象内容の対応関係を説明する原理は数学的な「同型性 (isomorphism)」に存する、と繰り返し強調している (Millikan 1995, p. 114; 2004, p. 84; 2005, p. 97; 2024, pp. 57-58)。

ところで彼女の主張とは対照的に、記号とその表象内容を対応付ける規則を因果関係 (Fodor 1987; 1990) や情報の流れ (Dretske 1981; 1988) に還元しようとする戦略が、志向性の自然化というゲームにおいて支配的な地位を占めてきた。そして実際、ミリカンの影響下にある目的意味論の理論家でさえも、その大半がこのアプローチに追随してきた (Martínez 2013, Neander 2017, Schulte 2018, Shea 2007)。ゆえに、ミリカンの鍵概念であったはずの同型性はさほど重要ではないものとして等閑視され (Fodor 1991)、また時には、同型性はミリカンが期待するような表象を可能にするという役割を果たし得ないという批判に晒されることもあった (Shea 2013)。

本発表では、ミリカンの目的意味論を群論的に形式化することができ、またそれにより彼女の議論を説得的かつ一貫したものとして再構成できることを論証する。具体的には、私は先ずミリカンが「変換 (transformation)」(Millikan 1984) と呼ぶ操作は群作用 (group action) とみなせることを示し、さらに彼女が言うところの同型性は群準同型写像 (group homomorphism) として理解するのが適切であることを明らかにする。

続いて私はミリカンの議論を群論の道具立てを借りて再構成することにより、以下二つの収穫を得られることを示す。第一の収穫として、Shea(2013)によって同型性概念の欠陥として指摘された問題は誤解に基づくものであることが判明する。群論的形式化という方法論は、ミリカンの議論を批判者から擁護するという消極的な目的に資するのみならず、「おまけ」として彼女が明示的に論じていなかった哲学的含意を引き出すという積極的な役割を果たす。これが第二の収穫である。というのも、ある特定の数学的構造がミリカンの哲学的主張のモデルとして機能するならば、その構造に関して帰結する数学的事実と平行な哲学的主張を、ミリカン自身の論述と整合性を保ちつつ、展開することが期待できるのだ。ミリカンは数学用語を厳密に参照することなく同型性を直観的に理解したまま議論を進めており、それが災いして本当ならば引き出しえたはずの哲学的帰結を上手く導出できていない。だが群論の活用はミリカンの哲学がもつポテンシャルを最大限引き出し、因果や情報といった概念に訴える主流派の目的意味論よりも魅力的な立場として彼女の目的意味論を再提示することができるのである。

参考文献

- Dretske, F. I. (1981). *Knowledge and the Flow of Information*. MIT Press.
- . (1988). *Explaining Behavior: Reasons in a World of Causes*. MIT Press.
- Fodor, J. A. (1987). *Psychosemantics: The Problem of Meaning in the Philosophy of Mind*. MIT Press.
- . (1990). *A Theory of Content and Other Essays*. MIT Press.
- . (1991). Replies. In B. Loewer and G. Rey (eds), *Meaning in Mind: Fodor and his Critics* (255–319). Blackwell.
- Martínez, M. (2013). Teleosemantics and Indeterminacy. *Dialectica*, 67, 4, 427–453.
- Millikan, R. G. (1984). *Language, Thought, and Other Biological Categories: New Foundations for Realism*. MIT Press.
- . (1995). *White Queen Psychology and Other Essays for Alice*. MIT Press.
- . (2004). *Varieties of Meaning*. MIT Press.
- . (2005). *Language: A Biological Model*. Oxford University Press.
- . (2024). Teleosemantics and the frogs. *Mind & Language*, 39, 1. 52-60.
- Neander, K. (2017). *A Mark of the Mental: In Defense of Informational Teleosemantics*. MIT Press.
- Schulte, P. (2018). Perceiving the World Outside: How to Solve the Distality Problem for Informational Teleosemantics. *The Philosophical Quarterly*, 68, 271, 349–369.
- . (2023). *Mental Content*. Cambridge University Press.
- Shea, N. (2007). Consumers Need Information: Supplementing Teleosemantics with an Input Condition. *Philosophy and Phenomenological Research*, 75, 2, 404-435.
- . (2013). Millikan's Isomorphism Requirement. In D. Ryder, J. Kingsbury, & K. Williford (Eds.), *Millikan and her Critics* (63–80). Blackwell.